

Title	ウィリアム・ジェームズによる「経験」概念の再構成と教育
Sub Title	
Author	岸本, 智典(Kishimoto, Tomonori)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2015
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学：人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.80 (2015.) ,p.101- 104
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平成26年度博士課程学生研究支援プログラム研究成果報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000080-0101

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ウィリアム・ジェイムズによる「経験」概念の再構成と教育

岸 本 智 典

1. 研究の目的と概要

本研究の目的は、19世紀の後半から20世紀の初頭にかけて活動した哲学者、心理学者であるウィリアム・ジェイムズ（William James, 1842-1910）の哲学思想における中核的考え（特に『根本的経験論論集』[*ERE*]にみられる見解）を彼の教育論との関わりにおいて把握し、そのような彼の考えの持つ教育学的な意義を示すことである。本研究は、ジェイムズが伝統的な経験論（特にイギリス経験論）や従来の（あるいは同時代に興りつつあった）心理学に対して行った批判的営為を「経験」概念の再構成の営みと捉え彼の「経験」概念の特質を明らかにすることを試みる、筆者が継続して行っている研究の一部である。本年度は特に、ジェイムズ以前のイギリスの哲学（イギリス経験論及びイギリス観念論）の伝統における「経験」概念と、それへの批判的再構成と考えられる（とりわけ1890年代以降の）彼の「経験」概念とを比較し、彼によってどのように「経験」概念が組み替えられていったのかの具体的な把握を目指した。

具体的には、ジェイムズの根本的経験論を特にイギリス理想主義／観念論（British Idealism）からの継承と展開という視点で捉え返し、両者に共通するいくつかの特徴を指摘した。例えば、イギリス理想主義者たちは一般に、「統一の仮設」「実在の霊的本性」を「進化」に適用し、自然と精神の差異を否定せず自然を精神化し、精神と自然は共通の基盤を持つ（それは自然を理解する必要条件でもある）として、「意識」「反省」「言語」は生存競争上の利点（advantages）とする議論（→神秘的な力で「意識」「反省」「言語」を説明するよりも、「自然選択」によって説明する方が適切と思われた）を行ったが [David Boucher, "British Idealism and Evolution," W. J. Mander (ed.), *The Oxford Handbook of British Philosophy in the Nineteenth Century*, Oxford: Oxford University Press, 2014, pp. 306-323.], この点はジェイムズ思想との重要な共通点と考えられる [ジェイムズによる「進化」理解については、Philip P. Wiener, *Evolution and the Founders of Pragmatism*, Gloucester, Mass.: Peter Smith, 1969.; Robert J. Richards, *Darwin and the Emergence of Evolutionary Theories of Mind and Behavior*, Chicago and London: The University of Chicago Press, 1987.等も参照]。

また宗教観においても、「宗教」を①「歴史的な」ものとして、②「神学」とは区別し、③「合理的に理解可能な」ものとして、④道徳性に関わる「実践的な」ものとして捉えた点が英国経験論者たちにおいては指摘し得るが [William Sweet, "British Idealist Philosophy of Religion," W. J. Mander (ed.), *The Oxford Handbook of British Philosophy in the Nineteenth Century*, Oxford: Oxford University Press, 2014, pp. 560-584.], この点もジェイムズ思想との比較を行う上で重要と考えられる。例えばチャールズ・テイラーはジェイムズの宗教観について以下のように指摘している。「宗教を論じるにあたってのジェイムズの視野が比較的狭いものであるということは、以前から指摘されてきたところである。ジェイムズは宗教を何よりも個人が経験する何ものであると見なしている。彼は個人的経験であるいきいきとした宗教的経験と、宗教的生活というものとを区別する。後者は、特定の共同体や教会を通して受け継がれているという理由からして、派生的なものである」 [チャールズ・テイラー『今日の宗教の諸相』

伊藤邦武・佐々木崇・三宅岳史訳, 岩波書店, 2009年, 2-3頁]。宗教の「真の場所」(*real locus*)は集団的な生き方 (*corporate life*)ではなく個人の経験のなかにあることになるが、「これはジェームズの主張の一面である」とテイラーは指摘する。またもう一つの面として、その真の場所は経験のなかに、すなわち感情 (*feeling*) のなかにあるということも指摘している。この感情は、感情を定義し、正当化し、合理化するような言語的定式化 (*formulations*) とは対立するが、こうした定式化の操作をしばしば行ってきたのが教会であり、ジェームズが「神学」とは区別されるものとして「宗教」を考えていたことがここで示される [前掲書, 5-6頁]。この点についても今後詳細な検討を行い、ジェームズ教育論の特徴 (可能性と限界) を浮かび上がらせる仕事に接続していきたい。

2. 研究の内容と成果

本節では、以下の第3節「本研究課題に関する研究業績」にあるそれぞれの研究 (特に①~③) について、それらの内容を概観する。

まずは①および③「初期ウィリアム・ジェームズの理想主義批判」であるが、本研究ではジェームズが1880年代から90年代にかけて自身の心理学関連著作の中で行った理想主義/観念論に対する同時代的批判——とりわけT. H. グリーンに対する批判——を中心的に取り上げ、ジェームズの理想主義批判の眼目が心理学の実践性の担保にあったことを示した。ジェームズによれば、理想主義に依拠する心理学はその学の対象に経験を越えたものを含んでおり、自然科学としての心理学たり得ないものであって、それゆえ実践的でないものであったとされる (より詳細な内容については①を参照されたい)。

主題であるジェームズによる理想主義批判が現われるのは、彼による心理学批判においてである。とりわけ、1880年代になされた内観心理学に対する批判のうちには、心理学における理想主義の問題点を鋭く突くものが含まれている。1884年の論文「内観心理学に見落とされたもの」 [*Epsy*, pp. 142-167.] において彼は、心理学にとって有害なものの一つとして「心理学者の立場と心理学者が報告をそれに基づいて行なうとみなされる感じの立場との混同 (*confusion between the psychologist's standpoint and the standpoint of the feeling upon which he is supposed to be making his report*)」 [*Epsy*, p. 161.] を挙げている。自然科学としての心理学において、心の観察者たる心理学者は心の外側に立って心を「客観的」なものとして眺めねばならない。このことを内観心理学は見落としている。「後期カント学派」と名指しながら、彼らが上述の混同の過ちを犯してしまっていることをジェームズは指摘するのである。

1890年に公刊された『心理学原理』の第10章「自我の意識」 [*PP*, pp. 279-379.] におけるグリーンら理想主義者に対するジェームズからの批判は、上述の「心理学者の誤謬」(「心理学者の立場と心理学者が報告をそれに基づいて行なうとみなされる感じの立場との混同」) の指摘に基づき、心理学における観察者と対象の混同を問題視する形で行われる。グリーンらは「[心理学の] 範囲外の諸項を心理学の適切なトピック—すなわち観察下にある心の心的経験—へと統合した [……]」。[[……] その帰結として、一つの有限でありないし批判可能であるがしかし「絶対的な」経験なるもの (*a finite or criticisable, but an 'absolute' Experience*) が生じるのであるが、そこでは対象と主観が常に同一のものになってしまうのである」。このことは、「科学の一区分としての心理学を減ぼしてしまう」、このようにジェームズは批判する [*PP*, pp. 347-8.]。ジェームズはグリーンの見解を採用することは実践的な心理学にとって致命的と考える。心理学者の認識対象としての「心的状態」はあくまでも時間のうちに場を占めるものでなければならないからである。対象を構成するものとして意識に対してのみ存在する「時

間の外にある」何ものかを措定してしまうことは、自然科学としての心理学から実践性を奪ってしまうとジェイムズは考えたのである。

本研究ではジェイムズが行った理想主義への批判を思想内在的に捉えることを目指しつつも、彼がそうした批判を行った意図を彼の言葉の中から汲み取ろうとしたが、後者のような課題は彼の言説だけを追って十分に答えられる類のものではない。彼が言説を残した当時の文脈、背景事情を考慮し思想的に検討することもまた必要だろう。これらは今後の課題としたい。

②「W. ジェイムズによる「経験」概念の再構成と教育」では、ジェイムズの「子ども」観や「教育」観が、彼による「経験」概念の再構成と密接に結びついていたことを明らかにすることを試みた。彼が「子ども」を有機体として捉え生物学的法則によって規定された存在と捉えつつも「部分的に自由な」存在とみなしたこと、「教育」を習慣形成と捉えたことは、従来の「経験」概念をラディカルに再構成した結果であると解釈できることを示した。

本研究では、リチャード・ローティ [Richard Rorty, *Consequences of Pragmatism*, Minneapolis: University of Minnesota Press, 1982, pp. 139-159. =リチャード・ローティ『哲学の脱構築プラグマティズムの帰結』室井尚・吉岡洋・加藤哲弘・浜日出夫・疋茂訳、御茶の水書房、1994年(旧版1985年)、317-356頁] やジョン・E・スミス [John E. Smith, *America's Philosophical Vision*, Chicago and London: The University of Chicago Press, 1992.] らの現代的評価を念頭に置きながら、わが国におけるプラグマティズム研究の成果に学びつつ [例えば、『理想』誌上の特集(「特集プラグマティズムの現在」『理想』理想社、第669号、2002年9月。特に、峰島旭雄「プラグマティズム——再評価のために」2-9頁、魚津郁夫「プラグマティズム概観——真理と实在」10-22頁、沖永宜司「プラグマティズムと意識論——ウィリアム・ジェイムズの議論から」35-46頁、加賀裕郎「自然主義的プラグマティズムの展開」47-56頁、高頭直樹「パトナムのW・ジェームズ解釈——真理論あるいは道徳論」80-90頁、黒柳修一「現在のプラグマティズムの系譜とその方向性について——二つの動向を中心に」91-101頁の諸論考]、「経験」概念の再構成を行ないつつあったジェイムズの思考とそうした彼だからこそ語り得た「教育」についての見解や採用し得た「教育」定義との関連について考察した。その際、「経験」概念の歴史的変容過程についてのデューイによる分析も参照した [John Dewey, "An Empirical Survey of Empiricisms," Jo Ann Boydston (ed.), *The Later Works of John Dewey, 1925-1953*, Vol. 11 (1935-1937), Carbondale and Edwardsville: Southern Illinois University Press, pp. 71-83.]。彼の子ども観や教育観も、「経験」概念の再構成という営みと無関係ではなかったとすることができ、その関連は「経験」概念の再構成の営みとともにあった「帰結」への着目が「行為」概念の拡大につながり(「行為」そのものが影響を与え変化させた結果である「帰結」をも「行為」が指すものに含めた)、延いては彼の教育観をも規定していくことになった、という点に見て取ることができることを示した。こうしたジェイムズの思考を経て現代にも通ずる有力な教育観が成立してくるのだとすれば、ジェイムズの「経験」概念を取り上げることは、そうした教育観、「教育」理解を問い直すための重大な契機となると考えられる。今後、彼の「経験」概念を成立させている諸条件についての検討をさらに進めることで、こうした展望に応えたい。

3. 本研究課題に関する研究業績

[論文・報告書等]

①岸本智典「初期ウィリアム・ジェイムズの理想主義批判」(部会研究例会報告・関東部会)『イギリス理想主義研究年報』第11号, 近刊。

[学会・研究会における個人研究発表]

②岸本智典「W. ジェイムズによる「経験」概念の再構成と教育」教育哲学会第57回大会(於: 日本女子大学), 2014年9月。

③岸本智典「初期ウィリアム・ジェイムズの理想主義批判」日本イギリス理想主義学会2014年度関東部会研究例会(於: 共立女子大学), 2014年11月。

④岸本智典「W. ジェイムズの根本的経験論・再考——British Idealismからの継承と展開」2014年度第3回比較教育理論・思想史研究会(於: 東京大学), 2015年1月。

・付記

本稿におけるウィリアム・ジェイムズの著作からの引用は全てハーヴァード大学出版局版の著作集から行なった。用いた略号に関しては以下を参照。

ERE: *Essays in Radical Empiricism*. Frederick Burkhardt (General Editor), *The Works of William James*, Cambridge, Massachusetts and London, England: Harvard University Press, 1976.

PP: *The Principles of Psychology* (3 Vols.). *The Works of William James*, 1981.

EPsy: *Essays in Psychology*. *The Works of William James*, 1984.

アメリカ専門職養成史におけるイエール報告(1828)の 意義に関する歴史研究

原 圭 寛

1. 本研究の目的

本研究は、1828年にイエール・カレッジから出版された *Reports on the Course of Instruction in Yale College* (通称「イエール報告」) と題する文書を、イエールにおける神・法・医の専門職養成の歴史を参照しつつ検討することで、同報告の解釈について、新たな見解を提示することを目的とした。

これまでの研究においては、同報告冒頭部に出てくる「精神の陶冶」(discipline of the mind) という概念が特に注目されてきた。これは知的活動を通して精神の諸力の拡張を目指すというものであり、知識の獲得やその応用と対置される概念であると先行研究では解釈されてきた。しかしこのような解釈で以て同報告を読み進めていくと、冒頭部では先に挙げた「精神の陶冶」を重視する旨が述べられているにもかかわらず、後に進むにつれて、カレッジにおいて広範な知識を獲得することによって様々な場面で役に立つといったような議論が展開されるという、論点のずれとでも言うべき状態が生じる。

これに対して本研究では、1) イエール報告以前イエール・カレッジにおけるカレッジ教授課程と専門職養成に関する議論、2) 1) における議論の延長としてのイエール報告における知識獲得の重要性に